頭陀袋 ㊶

平成二十七年十一月号

発行　中山かんのん

恩林寺

中山中学下、電話三四―一二四五

＊ありがとう。の由来

私たちは日常、有難うという言葉を使いますね。有難う。は仏教に由来する言葉です。そのもととなった話を紹介しましょう。

＊盲亀浮木（もうき、ふぼく）のたとえ

お釈迦様はあるとき弟子のアナンに問いました。「アナンよ。お前は人に生まれたことをどのように思っているのか？」するとアナンは「はい、大変喜んでおります。お釈迦様は「ではどのくらい喜んでいるのかね？」かさねて尋ねられ、アナンは言葉に窮した。するとお釈迦様は一つのたとえ話をされた。「果てしなく広い海の底に、目の見えない亀が居たとしよう。その亀は百年に一度海面に顔を出す。広い海には一本の丸太棒が浮いている。その丸太棒には小さな穴が開いていて、丸太棒は風のまにまに西へ、東へ、また、南、に北に漂っているのだ。百年に一度浮かび上がるその目に見えない亀が浮かび上がった拍子に丸太棒の穴にひょいと頭をいれることがあるとおもうか？」「お釈迦様、そんな事はとても考えられません。」「絶対ない。と言い切れるかな？」お釈迦様はさらに念を押されると、「何千年，何万年、何億年の間に、もしかしたら頭をいれるということがあるかもしれません。」と、アナンは答えた。「ところがアナンよ。私たち人間が生まれるということはその亀が丸太棒の頭を入れるよりもむずかしいことなんだ。ありがたいことなんだよ。」と、教えられています。

ありがたいということは、あることが難しいこと、めったにないこと。でも、人間に生まれることが難しいと言われても、気ずいたら人間でしたもんね。地球上には哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、蝶、蟻、目に見えないダニなど百五十万種類の生物が混在しているといわれています。そのなかの人間、六十億人、日本人、一億二千萬人。人間にしても生物の中のほんの一部です。ほかの生物でなくて、人間に生まれた。気の遠くなるような話です。曹洞宗の修証義の一節、人身得ること難し、仏法逢うことまれなり。です。今晩、寝る前に、独り言で唱えてみましょう。人身得ること難し、仏法あうことまれなり、今、われら宿然のたすくるによりて、すでに受けがたき人身を受けたるのみに非ず、逢い難き仏法にあいたてまつれり。と。

＊九月二十日、秋の彼岸会、永代祠堂の法要を務めさせていただきました。今回は農繁期に加え、ほかでも行事が重なりまして、こじんまりした法要でした。お経においでいただきしました尼僧様は、琵琶の演奏をされるとのことで、次回はぜひ、法話の代わりに琵琶を聞かせてください。と、お願いしました。お楽しみに、、、。